
遅れてきたプレゼント

瀬戸姫那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遅れてきたプレゼント

【Nコード】

N7416P

【作者名】

瀬戸姫那

【あらすじ】

クリスマスの夜。だけど、彼氏の「彼方」は約束の時間になっても帰ってこなく、一人待つ「真由」。一人寂しいクリスマスとなってしまうのか……？

「まだかな……彼方^{かなた}」

私は壁掛けの時計を見ながら、呟いた。

時計が指すのは、短針が11と長針は6。

窓の外は、暗闇の中にちらほら煌びやかな光が灯っている。

今は、午後の11時30分。

今日は”クリスマス”だというのに、彼氏である彼方はまだ帰ってこない。携帯電話の受信ボックスと着信履歴を確認するがメールも着信もきていない。

10時にくると言っていたのに、連絡ぐらくれたっていいじゃないかと思いたいけど、彼は社会人。私はただの大学生。仕事なのだから我が儘なんて言えるわけがないのだ。

だけど、ちょっとぐらい言わせて欲しい。

(……クリスマス終わっちゃうじゃん！彼方のバカ！)

頬^{ほお}を膨らませ、心の中で拗^すねてみる。

私はテーブルにあたりリモコンを億劫に取り、テレビの電源を入れた。だが、チャンネルをいろいろ回して、5分もしないうちに消してしまった。リモコンをベツトに放り投げて、私も勢いよくベツトに飛び乗る。

「はぁ……」

大きな溜息^{わけ}一つ。

溜息^{わけ}の理由はテレビ番組。どの番組もクリスマス一色であったからだ。

サンタの格好してでてきた人気の司会者。トナカイになりすました真っ赤のペンで鼻を塗ったお笑い芸人。

別にこれだけならよかったのだが、ニュースでさえ、雪がどうのこうのでホワイトクリスマスでしたねとキャスターが笑ってる。腹が立つという類ではない。

急に寂しくなってしまったのだ。

私は近くにあった枕をぎゅっと抱きしめた。

―― 彼方と初めて迎えるクリスマス。

―― 彼方と初めて迎えるイベント。

（ただ一緒に過ごしたかっただけなんだ……）

不意に時計に目をやると、とっくに12時をまわっていた。

やっぱり間に合わなかったのだと、落胆の溜息をついた。このまま寝てしまおうかと思った瞬間、鍵をあけるような音がしたような気がした。幻聴かと思い、目を閉じる。

だが、それが幻聴ではないと足音が教えてくれる。

（彼方だ……）

それが分かっているながらも、私は目を閉じたままいた。

ぎー…とドアが開いた。

そつとできるだけ音を立てないようにと、私への気遣いが伝わった。

「真由…」

私を呼ぶ声。私の待ち望んでいた声。

それは優しく、どこか寂しさも交わる声だった。

どんどんベッドに近づいてくる。そしてそつとベッドの端に腰掛けたのがわかった。

「ごめんな…」

そう言って、彼方は私の髪を優しく撫でた。

「真由」

どんどん顔が近づいてくる気配がする……。

彼方の吐息を唇に感じた瞬間、私は目をぱっと開いた。

キスされそうになったのに驚いたのもあるが、私の問題は“そこ”じゃない。

私がいきていると知らなかっただろう彼方は目をぱちぱちさせている。

「彼方……っ」

頬を膨らませて、しかめっ面を作り、目の前に居る彼に抱きつく。それを当然だと彼方は受け止めてくれる。

だがそれは一瞬のことで、私は抱きついた手を離し、彼方と目を合わせてさっき思った”こと”を吐き出す。

「なんで、口にチューなのよ！寝てる時は、普通おでこでしょ！？白雪姫じゃないんだからね！！口になんかしたら息苦しくなっちゃうじゃないの！」

彼方はそれを整然と聞き流し、揶揄した表情で笑い、逆に私に聴き返してくる。

「へえー、真由。そう言うってことは寝てなかったんだ……？まだ触れないよ？」

「寝てたよ、彼方が帰ってきたのは知ってたけど」

「それ、狸寝入りッて言うんだよ。悪い子だな……もう」
溜息交じりの言葉に私は反論する。

「悪い子って何！私は子供じゃない！」

「はいはい、わかったわかった」

彼方は楽しそうに笑いながら、私の反論を聞いている。

「今日……じゃなくて昨日は、クリスマスだったんだよ！初めて迎える大事な！」

しゅんとしてしまう私を彼方は、さっきよりも強く撫でて抱きしめてくれる。

（やっぱ子供扱い……）

そう拗ねていた私だが、実はずっと言いたいことがあった。

躊躇^{ためら}っていたが、彼の温かさに触れたら言いたくなってしまった。ゆっくり彼方の肩に凭^{もた}れさせ、小さな声で言った。

「ねえ、どうして連絡してくれなかったの？せめてメールしてよ。心配したんだよ？」

ずっとずっと想っていた。

クリスマスより、大切な彼方^{かれ}のこと。

本当はクリスマスがどうかで拗ねたんじゃなくて――

——もし彼方が事故に遭っていたら？

——もし彼方が事件に巻き込まれていたら？

こんなこと考えるのは普通じゃない。そんなことは分かっている、分かっているけど……ただ彼方のことが心配だったから、思ってしまったのだ。

「ごめん」

彼はさっきまでの笑みを消して、そう囁いた。

「いいよ。許してあげる」

現金もので彼方の真剣な声を聴けがすぐに許してしまうのだ。

「でも、どうして遅かったの？連絡もないって初めてだったから」

「ああーそれは……」

彼方は自分のカバンを持ってきて、何やらごそごそとし始めた。何かを探しているようだ。

「うん？」

有ったと、彼方は鞆かばんから何かをとりだした。

「これだよ」

私の手に置いたのは手のひらサイズのボックス。

（あれ？この大きさはもしかして……指輪？）

と思っけて開いてみると。

「……ネックレス？」

「そう。ネックレス」

紛らわしい入れ物に入れないで欲しいと思う。

一瞬身構えた私が恥ずかしい。

だが、よく考えてみるとそれが普通だと思う。まだ付き合い始めて2ヶ月だ。婚約とか結婚とか突飛なことを言うはずもない。

「本当に遅れてごめん。ずっと前からこれにしようとは決めてたんだけどな、行ったら店が閉まってて」

「え？でも、これ……」

私の目の前にあるの紛れもなくプレゼントで。でもそれって……。私のために……？）

視線でそう伝えようと、彼方はただ微笑んだままである。

「ありがとう、嬉しい……」

そう嬉しさを囁みしていると、

「じゃあ、ご褒美頂戴」

そう言って、彼方は私の肩に手を置いて顔を覗きこんでくる。

「えっなに？」

「俺もそのご褒美あげるから」

目を瞑って、彼方はじっと待っている。

（もしかして、キスを求められているのかなあ……？）

ゆっくりと顔を近づけて行くけど、近づくにつれて恥ずかしくなってくる。

いってしまえ！と、勢いで唇をぶつけると、彼方は優しく受け止めてくれた。

「こっ、これでいい？」

触れ合っていたのはほんの一瞬だけど、顔が真っ赤になってしまったので俯きながら、ぼそぼそと呟く。

「よくできました。俺からのご褒美はこれです！」

ギューツと苦しいぐらいに抱きしめられた。

「？」

「俺と今日一日デート券です！」

「ほえ？」

意味が分からず首をかしげると、彼方は苦笑した。

「休みが取れるか分からなかったから言えなかったんだ」

一拍おいかれて囁かれた言葉。

「一日遅れだけだな。デートしよう」

手をぎゅっとに握られて、

「ネックレスもつけてくれるだろ？」

もちろん、それが嬉しくない訳がなくて……。

「うん！」

私も力強く握り返した。

「ねえー彼方、雪降ってきたよ！雪！」

窓の外を目を向けると雪が降り始めていた。

私はベットを飛び出して、カーテンをバツと開けると、そこは一面に広がる雪景色。彼方もベット降りて、窓の外に視線を向ける。

「本当だ」

「綺麗……」

そこで私と彼方は大事なことを言っていないことに気付く。

『メリークリスマス』

優しいキスをして、二人は微笑みあった。

彼方という時間は短くて、寂しい時もあるけど、今が大切なんだ。

” 幸せ ”

そう思える時間が今ここにあるから……。

ねえ——明日はどこに行こう？

デートスポットで有名な水族館とか遊園地にも行きたいな。

カフェでのんびり話しながら過ごすのもいいよね。

それとも二人で好きな食べ物をたくさん食べに行こうか。

まあ私は、手をつないで、一緒に居られるだけでいいけどねっ。

二人だけのクリスマスの夜は更けていく――

（後書き）

はじめして、こんばんは、瀬戸姫那と申します。

今日で、小説を書き始めて2周年を迎えました。

この名前では初投稿なので、新たなスタートです。

久しぶりに書いたので、文がおかしな部分が多々あると思います。
ご指摘お願いします。

今回のテーマは、クリスマスの一日後。「私の小説書き始めた日」
にちなんで書きました。

本当は1000字ぐらいの短いお話にしようかと思ったのですが、
妄想が膨らんで倍以上の量になってしまいました（汗

私は基本BLを書いているのですが、こういうほのぼのとしたお話
も好きです。

次回から連載小説書き始めていききたいと思っています。

更新は遅いと思いますが、これから「瀬戸姫那」をよろしく願ひ
します。

読んで頂き、有難うございました！

2010年12月26日

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7416p/>

遅れてきたプレゼント

2010年12月26日22時25分発行